



綿紡績で蓄積されたノウハウから 新しい繊維素材と商品を創出する

綿糸を紡いで65年、ジーンズのデニム糸をはじめとする高品質でユニークな繊維素材を提供し続け、今や京都府で唯一となる紡績会社、綾部紡績(株)の松田 英治 社長にお話を伺いました。

綿の紡績を軸に、生産の多角化と最終製品の提供へ

昭和23年和知町で創業、同26年に綾部市の誘致工場として現在地に移転して以来、綿紡績をメインに事業展開をしています。

大手紡績会社の支えのもと、その下請けに携わったのち、同じ番手(糸の太さ)範囲で作るデニム糸の製造を開始。その間、レーヨン(再生繊維)やアクリル、ポリエステルなどの100%合成繊維、綿糸とそれらを混ぜた混紡素材なども多く手掛けていますが、徐々に高級デニム糸にシフトし、今では当社売上高の50~60%を占め、当社のベースを築くものとなっています。並行して、新しい紡績技術に対応するため積極的に新鋭設備の導入を行ってきました。

リーマンショックの厳しい荒波に揉まれもしましたが、デニム糸にかなりのウェイトを置いていたことで、量的にはそこそこの受注を確保できたため、何とか乗り切ることができました。不景気にも強いと言われていたジーンズですが、それでもかなりの痛手です。これを契機に、事業基盤の強化、事業の多角化の重要性を認識しました。



従来当社は全く最終の自社製品製造経験のない川上の企業で、営業への注力も今ほどではありませんでしたが、初めてタオルという最終製品の製造に取り組み、デニム糸という太い柱があるうちに次の柱を確立すべく、それを水平展開した様々なアパレル製品展開への挑戦を始めました。営業部門の人的強化も図り、数多くのタオル機屋さんを巡って、実用新案登録(第3153942号)ができた「オフセットヤーン」の販促・営業を重ね、ようやく、イメージした柔らかでボリューム感豊かなタオルの販売を開始できたのが2年前の平成23年です。

紡績をベースにしていくにしろ、多角的な事業モデル、マーケットの確立を目指し、この新素材の応用展開を含め、現在、このタオルを「おうえん~やん」という商品名でブランドに育てていくため、事業を展開中です。



※紡績…原料の綿花を紡いで糸にすること

プレミアムゾーン・ジーンズで存在感を放つ高級デニム糸

当社の高級デニム糸は「カイハラ」で生地加工され「EDWIN」「ユニクロ」などの商品となって広くご愛用いただいています。

デニム糸の大半を国内デニムの大手企業、カイハラ(株)に納めています。カイハラデニムはブルーデニムの分野で国内シェア50%以上を占めており、輸出においても国内トップのシェアです。日本のデニムの加工技術、素材の技術は世界のトップクラスですので、プレミアムゾーンと呼ばれる高級ジーンズブランドの素材では、世界から「日本のカイハラの生地を」という指定買いが多いのです。そのカイハラデニムの10%に当社のデニム糸を供給しており、当社のデニム糸の国内シェアは約5~8%を占めていると考えられます。また、一定、国内向け商品に充てられていますが、カイハラへの当社供給の3分の1はアメリカ向けで、プレミアムゾーンの素材として高い評価を受けています。

昔、デニム糸は針金のように真っ直ぐで均一な糸が良しとされました。ところが今は、昔ならクレームの対象になった濃淡のムラがチラチラ走っている生地が求められます。洗うことによって色の剥げ方が徐々に変わるといふデニムの特徴は糸自体の性格によります。糸を形状変化させており、この場合糸の太さに太い、細いの違い、その太さの長さの違いを持たせているため、表に、より高く出ている糸はよく当たるから白く剥げるわけです。デニム糸の染めはローブ染色といって、芯を白く残して染まらないよう、表面だけを染めています。それがジーンズ独特の味わい深い色落ちを生むのですが、デニムの表面を物理的に加工してユーズド感を出すこともできるのも、この染色方法に加えて、太さの違いという形状変化が効果的に働くからです。“チラチラ感”の出具合が微妙で難しいのですが、当社独自の形状変化が生かされています。

多品種少量生産に応える個性的な製品群

当社はデニム糸以外にも、従来多彩な繊維素材の製造を行っています。合繊100%の糸づくりも古くから手掛けてきましたので、綿糸を含めたそれらの混紡糸という製品群です。素材の組み合わせに加えて、形状変化や撚り方の変化などで付加価値をつけることもでき、多種多様な用途に提供させていただいています。

ニット(編物)用の糸では、今流行りのユニクロのヒートテックなど同様の機能を持つ糸を、大手繊維メーカーが特許を取られる5年ほど前から手掛けて製品化しており、例えばイトーヨーカ堂さん向けのトレーナー用商品として、今でも年間200~300トン

を生産しています。吸湿発熱機能を謳ってはいなかったのですが、製品として既に供給していました。

織物用の糸では、例えばカーペット用を10年ほど前から手掛けています。カーペットというのは従来合織かウールがほとんどでした。ご承知のようにウールは高価で、綿が合織に比べても一番安価な時に夏用の綿のカーペットという需要を作り出しました。

これらはすべて、地道な提案型営業の努力でアパレルメーカーなどを回って集めてきたもので、リーマンショック後の厳しい時期に種を蒔いていたものに、今、やっと芽がつかってきました。お客様と相談を重ね、素材の組み合わせや代替素材、織物⇔ニットの代替などを提案させていただきま。当社はこれだけしかできませんと、糸を機屋さんやニット屋さんに売って終わりとすることなく、お客様の要望に応えるキメ細かな舵取りを常に念頭に努力してきた結果、細かいけれども数多く生まれてきた多品種少量生産に対応できるようになりました。

「オフセットヤーン」に代表される独創的商品開発が最終商品の製造・販売に結実

特殊紡績糸オフセットヤーンは社内の提案制度から生まれました。特にタオルを作ろうと考えて糸を作ったわけではなく、ニット用として開発した糸です。普通、糸というのは編めばねじれるのですが、糸の内と外側で撚りトルクを相殺し、右と左の絶妙の撚りバランスで“ねじれない糸”ということで開発しました。左右の糸の撚りで繊維間を作ることで、吸水性・保水力も高まります。それまで付き合ひのなかったタオル機屋さんを何十軒も販促して回り、試作を重ねてもらい、その中で一番良かった、当社の糸を生かして織ってくれたのが大阪・泉州のタオル機屋さんでした。四国・今治と並ぶタオルの代名詞的産地の「泉州タオル」の製織技術と相まって、軽くて柔らかく、しかもボリューム感があっていつまでも嵩やかな糸で仕上げられた、最高級スーパー綿使用のタオル「おうえ～やん」は、手にして一瞬でその良さが実感できます。

当社は製織・縫製工程は持っていないので、その部分は泉州のタオル機屋さんに任せて良い味を出してもらいますが、初めて作った自社最終製品をタオル機屋さんと共に当社で販売しています。まだ当社売上高全体の10%にも及びませんが、この糸からの応用商品も含めて展開中です。

例えば、3種類の太さによって夫々が「吸水・拭き取り・やわらかさ」の機能を持つ糸がランダムにタオル表面のパイルとなって表れ、独特の肌触りを持つタオル「スリータイムズ」を開発、販売中です。

また、オフセットヤーンをニットにしたハンカチも試作済みで、ニットならではの肌触り・風合いに伸縮性が加わります。市販タオルの99%は“織物”ですから、非常に珍しく、今後の販売、展開に期待をかけています。

地産地消の理念のもと、バランスのとれた事業の水平化と垂直統合化によりスパイラルな事業展開を目指す

気が付いてみると、当社の得意とする太番手の範囲の糸を扱

う国内同業他社が少なくなっています。このままいくと、当社規模では10社にも満たなくなりそうです。現在の生産規模を維持しつつ、ギリギリ量産もでき、かつ小ロット生産ができる日本で数少ない企業として生き残っていけると展望しています。

①高品質デニム糸への高い評価により、当社の基盤となるに足る仕事量を確保できていること、②営業から生産現場に至るまで、キメ細かな対応による多品種少量生産体制が確立できていること、③消費者により近い立ち位置に立つ、タオルなどの最終製品の製造・販売の足掛かりを掴んでいること、この3本柱が当社の強みと言えます。

当社の納品先企業が海外での販売活動を大いに展開されていくことは当社へも良い波及効果を及ぼし、嬉しいことですが、当社は基本的に海外への進出は考えておらず、この綾部の地で生きていくつもりです。京都の中で地産地消を実現しつつ、多くの付加価値を付けていくものづくりの仕事をしていきたいと考えています。

紡績を主体とし、繊維素材からアパレル製品までを生産・販売する垂直統合型企業を目指します。オフセットヤーンに代表される新素材の開発・販売、事業の多角化は、直接にはリーマンショックが契機でしたが、より消費者に近い最終製品を見据えた事業展開への志向でもありました。

これらのことをより確実にしていくために、他社とのタイアップ・コラボにより京都から発信する「京都タオル」ブランドの立ち上げや当社の糸が使われるタオルを京都の味を醸し出す京都の定番みやげ品にすることなどを構想するとともに、オフセットヤーンとは違った機能性を持つ糸の開発も視野に入れていきます。できる、できないは別として、丹後のシルクと綿の混織なども考えていけば面白いと思っています。当社で「ガラーシャ」と名付けた、かつてのガラ紡という糸の再現も進めています。均一で撚りの強い西洋紡績に駆逐されたガラ紡ですが、甘撚りで糸自体に凹凸があるために吸水性・吸油性が良く、綿の黒いカスが付いたり形状が不安定で、風合いが手紡ぎに似ているため、最近カジュアルなシーンで求められる部分があります。再現性を確保することが難しいところです。

人々の生活様式の多様化・質の向上から、タオルも使い方が変化し“買うもの”から用途に合わせて“買うもの”になってきています。当社は、ファッション・ニーズという激しい流行の波を先取りし、時代の一步先を見つめながら研究開発とマーケットの確立に取り組み、エネルギッシュでスパイラルに広がる事業展開を目指してまいります。

Company Data

綾部紡績株式会社

代表取締役／松田 英治 氏
所在地／〒623-0042 京都府綾部市岡町斗代12-1
電話／0773-42-1010
設立／1948年7月
資本金／1億円
従業員／60名
事業内容／綿紡績業、高級デニム糸、太番手斑糸、ファッションカジュアルヤーン、特殊多層構造糸の製造及び販売
グループ会社／アヤベキスタイル株式会社など



お問い合わせ先

京都府中小企業技術センター 企画連携課 企画・情報担当 TEL:075-315-8635 FAX:075-315-9497 E-mail:kikaku@mtc.pref.kyoto.lg.jp